

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十四年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十八巻十号（通巻第二一四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第214号

2. 2012

肩凝り

品川 鈴子

初髪の地肌透け透け石頭

煤はらひいつかこの間に北枕

年用意メモに俳句の片言も

木瓜の実に艶荻窪の文人邸



戻り寒成るべき話躓きて  
雛飾る機嫌伺ひ声にして  
物書きの雛か右肩下がりなる  
親王雛肩凝り解し奉らん  
向かひ風伊吹雪形如何ならん  
ローラー展べ伊吹雪形ただ四角



# 玉鈴

# 吟

兵庫 内藤三男

通るたびそつと持ち上げ庭の萩  
一つとは寂しき数よ帰り花  
穴あけし頃語りつゝ障子貼る  
帰省して一日を回天基地の島  
孀恋産キヤベツを妻に送りけり

兵庫 中尾廣美

流人なる世阿弥も見しや大西日  
立山の冠雪遙か夫の郷  
浜磯菊佐渡の金山郭跡  
補聴器に人声遠く蓼の花  
感動を詩にと誓子の句碑の秋

大阪 中島霞

椎一つ拾ふ殯の宮にかな  
初紅葉みささぎに絵師けふも来て  
黄落の野外に並ぶパイプ椅子  
冬麗の葛城をちに小板橋  
賀状書くさ中に受けし喪の葉書

兵庫 中島節子

帰宅急く背へ火の用心の声  
積る雪見あげ吐息の二度三度  
除雪車の噴き上ぐ雪の白きまま  
隙間風何処からとも測りかね  
金蒔絵の鈍き光や屠蘇の盃

大阪 中田寿子

石仏も間延び顔なり神無月  
小春日や仏足石と仏手石  
石路咲いて明るき露地となりけり  
狛犬や銀杏落葉に埋もるる  
朴落葉森の精霊乗り遊ぶ

神奈川 永塚尚代

健やかに物食ふ男秋深む  
幼顔残す少女や野バラの実  
移る世を映すガラス戸石路の花  
畳まれしブルーシートや枯蓮  
避けきれぬほどに銀杏落ちてをり

大坂 野口喜久子

小春日を拾ひ歩きの昼休み  
銀盤にスケートの創恋の傷  
山門を出てゆく咳のひとつあり  
流行も一寸取りゐて着ぶくれる  
蔦紅葉這はす館にドーベルマン

兵庫 蓮尾みどり

唐半子口ほどになき好好爺  
一本の茸めし汁茶碗蒸し  
菊日和叙勲の額の塵掃う  
手に余り掘りし庭の草紅葉  
憂国忌もはや昭和も遠し遠し

兵庫 長谷川鮎

般若経和す大師堂寒あやめ  
真言の唱和に遅れ浅き春  
忠敬の料紙佐原に梅見月  
石庭に抜け穴のあり落椿  
バスに触れ旧街道の落椿

兵庫 林 哲夫

明石にて酒肴の鱸見つけたり  
残る蚊や勧誘員のしつっこく  
夜なべして母と娘が仲直り  
看護師の項の白さ林檎剥く  
北窓閉づ今日は見舞の客もなく

兵庫 林 丈智

洩水はもう澤山と外出す  
トンネルを抜けて黄葉またもみぢ  
立冬の雨軒の端を走りつつ  
句会果て夕餉はひとり湯豆腐を  
賀状の筆上達せねど確かなり

愛媛 福島松子

濃紺の雲抜けばつかり冬の月  
遮断機の向かうへ手を振る冬の暮  
売家の看板彩る 蔦紅葉  
咲き満つる蕎麦猪垣に守られて  
棚田ただ静かに秋の日の暮るる

愛媛 福田かよ子

穴まどひ畦一文字に通せんば  
飛行機が突っ込んでゆく秋夕日  
老住い生活音のみ石路の花  
常夜燈今日は灯りて草紅葉  
雨激し善根宿へ秋遍路

兵庫 藤井久仁子

角切られたるさ牡鹿の日の空ろ  
天平の香り纏ひて濁り酒  
風に乗る塩辛蜻蛉睦みしまま  
談笑の中に入れず秋深し  
ビーズ玉床にこぼるる夜寒かな

兵庫 藤田かもめ

隠沼かくれぬの辺りひよつこり狸現れ  
山莊の門戸を覆ふ霧襖  
しあわせの村の冬至湯ひもすがら  
冬ざれのお百度参り明烏  
山里の暗き雪隠鹿の声

兵庫 史あかり

引き返すこと出来ぬ道冬に入る  
幼子は乳吸ふやうに蜜柑食む  
炊き上がる新米しやもじを翻し  
手の十指借りて五本指ソックス  
太く濃きイスタンブールの冬の虹

兵庫 古井公代

草紅葉犬が喜ぶまはり道  
聞き覚えありし訛の通草売り  
立冬の朝の納豆やゝ堅し  
独り言に独りうなづき夜長し  
おだてにはすぐに乗る性質たち葱刻む

大阪 古林田鶴子

給食膳ちよつとおしやれに菊臙  
緊ほぐす木犀の香の待合室  
竜田姫降り立ついてふ寺の鐘  
山下の猪の親子の美食ぐせ  
団栗をポケット一杯園児たち

香川 細川知子

美男葛童顔髭でまぎらしぬ  
馬上杯たき割りたる神の留守  
晩年の誓子おかつぱ冬夕焼  
野紺菊供物をはこぶ若き僧  
冬の蜂左右対称してをらぬ

兵庫 細野恵久

電線の雪截金のごとく散る  
岩肌に鴝色ほのか日脚伸ぶ  
凧上げの子ども三人母二人  
移されし里程元標冴え返る  
古草に降るか降らぬかほどの雨

愛媛 松井洋子

小春日のジャグラー何でも抛り上げ  
犬逝きて庭に形見の梅檀草  
神の留守嫁して九度目の引越しす  
貼りたての障子山家の格上がる  
蒼空の深淵見せる霜の朝

埼玉 松木清川

竹藪を刈る人のみて烏瓜  
解体の家の瓦礫に秋の雨  
秋の陽を包みて布団仕舞ひけり  
耐へかねて畑に落つる榎櫃かな  
新築邸塀に居並ぶハロウイン

愛媛 松本 恒子

葛原の風裏表うらおもて  
身半分かくし切れずや穴惑ひ  
柿すだれ後家の砦を飾りけり  
足湯して告白長し石路日和  
言葉にも色付けてほし紅葉下

愛媛 三浦 澄江

雁帰る四阡籽を竿になり  
鳥帰る蒼い地球を半周し  
やれしんど話す夫なし日々草  
涙もろく人に好かれし白木槿  
あいまいに生きては居らぬ石路の花

兵庫 三枝 邦光

秋風や明日香に昏るる千枚田  
夜寒かな辻占ともす煉瓦道  
明日会ふ指切りげんまん十三夜  
奈良町のお尻美人で鹿の去る  
秋日影思ひは恋かロダン像

兵庫 水野 範子

初恋は着流し誓子山眠る  
曾爾の芒百万本の極みなり  
その事に互ひに触れず残り菊  
穴惑ひ礫かれしままに干涸びて  
秋灯下螺子いつばいにオルゴール

兵庫 水野 弘

鼻声や炉燵抱えて微睡みぬ  
寒き朝紅き色垂る犬齒跡  
深夜にも蟋蟀の鳴く手水鉢  
犬あやしあやし咬みつく凍てし指  
小雪舞う包帯の指杖を振る

香川 三橋 早苗

城下にはあまた弾痕甘藷掘る  
天高し錦江湾を行くフェリ  
有馬の湯渾々と湧き地虫鳴く  
秋時雨大念珠繰り連句の座  
洗い張り板を卓とし置く竜胆

茨城 三輪 慶子

腰高に落葉掃く人紺がすり  
離宮苑葱の畑も借景に  
朝日影金地浮きでる襖紙  
昼の月松琴亭の月見台  
秋日和案内人の関西弁

埼玉 向江 醇子

立冬やズボンの裾を風抜ける  
忘年会西日の当るレストラン  
木枯しや無き筥の扉のきしみ聴く  
炬燵より逃げ出す猫の名は小町  
ギャンブルは無になる時間冬の雨

# 鈴の奏

品川鈴子選

「武相莊」茅葺き屋根に床暖房 東京 堤 節子

熟柿生る落下注意の札下げて

佗助の大きく育つ茅葺家

毬外し児の傍に置く栗拾ひ

村祭りら蹴散らして猿田彦 兵庫 大西 和子

鯛雲町家の残る鍛冶屋町

暮の秋格子づくりの野里行く

広重も七つ立ちして秋の旅 兵庫 荒木 稔

巫女溜りのぞいてゆきぬ赤とんぼ

小春日や駅弁の蓋そりかえる

浄瑠璃の部活の出来や島は秋

憂愁のゴリラの背中 秋小寒 兵庫 先山 実子

棘の無き古木 柀花まばら

児等二人の席をゆずれられ冬ぬくし

白皙の若き主治医の木の葉髪

そぞろ寒湯上り 湿布あちこちに

越南のビールはぬるめ 一人旅 大阪 吉田 和子

纏頭集む祭り若衆にきび面

山車を追ひかけすぎて迷ひ道 山車に白さ 際立つ祭足袋 兵庫 市橋 香

戦も地震をもくぐり木の葉髪

湯豆腐や単身赴任重ねけり

職員室のストーブを背で囲み

凧や転勤の子は沙汰もなし

知日を早々灯す 寡婦の家 兵庫 鈴木 愛子

コスモスの群生に青い鳥ぬそう

ジャズスイング 枯葉の神戸北野坂

イタリアン料理は秋の野生肉なる

秋の波覗く オブジェの夢 レンズ 兵庫 野沢 光代

冬羽織 回文の詩棒 読みす

目配りの届かぬ 榎榎実を成さず

穴 惑い 駅の構内 工事中

踏まれてもふまれても 咲く冬 堇 愛媛 沖 則文

顔浮かぶ字の美しき年賀状

柿持つ 諸手も凍つる 初神楽

餡子餅入れし 雑煮や 讃岐人

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 近藤 倫子 //

\*選句は全て 品川鈴子

「武相荘」茅葺き屋根に床暖房 堤 節子

白州次郎は吉田茂の側近として、戦後の進駐軍との接渉に大きな役割をなした。当時の日本では稀有の個性派で、進歩的な考えと伝統を尊ぶ美意識をあわせ持ち、スマートな生き方を実践。その一例としても「武相荘」という茅葺の旧邸宅には床暖房を施してあり、「落下注意」の札付き熟柿も面白い。

広重も七つ立ちして秋の旅 大西 和子

「七つ立ち」とは七つ時（今の午前四時）に宿所を出発することで、歌川広重の東海道五十三次を描く旅では、まだ暗い景色の中を出発したのだろう。作者も暗いうちに起きて、東海道新幹線に乗り、晩秋の旅に出た。

巫女溜りのぞいてゆきぬ赤とんぼ 荒木 稔

神に仕える巫女は、清らかな乙女たちで、神事の時は近寄り難い感じだが、出番待ちの休憩所ではひとときの寛いだ風情で、また違った魅力をたたえている。巫女の緋袴と同じ色の腹部を持つ赤とんぼは仲間だから、素通りはできない。

棘の無き古木柎花まばら 先山 実子

若い柎の葉の縁には先が鋭い棘となった鋭鋸歯があるが、老樹になると棘は次第に少なくなり、葉は丸くなってしまふ。これが柎かと思間違うほどだが、まばらながら健気に花を咲かせている。自然から教わることは多い。よく見ると白い可憐な花である。

越南のビールはぬるめ一人旅 吉田 和子

一人旅で訪れたベトナムで出されたビールがあまり冷え

てなかったのだろうか。日本なら文句の一つも出るところだが、開放感からか、一人旅の心細さからか、黙って口にしてみる。ベトナムのビールはこうなのだと言手に解釈してしまえば少しゆるめの異国のビールの味わいもまずまず。その舌触りも喉越しも旅の思い出となる。

凧や転勤の子は沙汰もなし

市橋 香

地球のどこにいても連絡の取れる時代なのだから音沙汰のないのは元気に暮らしているという事。それはわかっているが、そういう時代だからこそ電話の一つもあつていいのでは？とも思う。いくつになつても子は子、まして慣れぬ地での単身赴任なら尚更。「凧」と「沙汰」の響きの冷たさが、返つて親心を感じさせる。

短日を早々灯す寡婦の家

鈴木 愛子

冬に向かい徐々に日が短くなる季節はそれでなくても寂しさが募るのに、一人ならますますやりきれず、早めに灯りを点ける。長き夜、一人で過ごす楽しみもきつとあるはず。お健やかに過ごしてください。

穴惑い駅の構内工事中

野沢 光代

大プロジェクトであった大阪駅の工事もやつと完成した。そういえば工事中には不便極まりなかった。回り道させられたり、足元が悪かったり……。穴惑いの蛇のように出たり入ったり……。久々の上阪の折の自分と蛇の婆が重なった。

餡子餅入れし雑煮や讃岐人

沖則 文

香川県の雑煮は白味噌に餡子入りの丸餅。他県人には理解し難いだろうが、讃岐の人には欠かせない自慢の郷土料理である。保元の乱に敗れて流された崇徳上皇が京より持ち込んだとされる白味噌と、讃岐三白の砂糖を使った甘い餅の組み合わせは絶妙。是非お試しください。

行きずりの人にほめらる松手入

福島 悠紀

自慢の松の剪定を終えてその松を眺めていたら偶々通りかかった人が褒めてくれた。松は手間もかかるし、剪定も難しいとされているが、コツさえ掴めば素人にもできるのか。松の木の似合う立派な門構えの家が目に見えぬ。主も褒められてまんざらでない様子。(以下略)